

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, 変貌を遂げたシンガポール、その発展の秘策は？
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 115, No. 11, pp. 28-29
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 115, No. 11, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2018, 11



知財見聞録

変貌を遂げたシンガポール、その発展の秘策は？

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

去る9月4日、アセアン知的財産協力ワーキンググループ (ASEAN Working Group on Intellectual Property Cooperation: AWGIPC) の会合がシンガポールで開催され、筆者も参加の機会を得た。

56回目となるAWGIPC会合

1996年に設立されたAWGIPCの会合は今回で56回目を迎える。毎年2～3回の会合を定期的に開催し、「国民のために知的財産を使用し、アセアン地域が国際的な知的財産制度の枠組みのなかで積極的な役割を果たし、アセアンを革新的かつ競争力のある地域に変える」というAWGIPCの目標を達成するためにアセアン10カ国の知財庁が協力してさまざまな課題解決に取り組んでいる。

その活動に対して先進国は多くのサポートをしてきており、日本からAWGIPCへの支援もこれまでに大きな実績を挙げている。今回の会合は変貌著しいシンガポールが舞台となった。

高級リゾートホテル：マリーナベイ・サンズ

筆者はシンガポールを度々訪問していたが、それは20年近く前のことである。その後、何度か出張で訪れたが、街中を見る機会もなくとんぼ返りをしていたので、これまでその変貌ぶりに気付くことはなかった。

まず驚いたのは、AWGIPCの開催場所が有名なマリーナベイ・サンズ (Marina Bay Sands) であったこと。2010年に開業したホテルだが、実物を目にするのは初めてである。

この総合リゾートホテルは、タワー1、2、3と3つの超高層ビル（最高部の高さは200m、57階建て）を屋上で連結した構造である。強風や地震に耐えられるのか心配になるほど巨大でユニークな形をしている。3つのタワーに面する道路の反対側には、大きなコンベンションセンターがあり、訪れた日も多くの会議やシンポジウムなどが開催されていた。AWGIPCの会合はこのコンベンションセンターの4階で行われた。

筆者はAWGIPCの会議終了後に、これら3つのタワーのロビー階と57階を歩いてみた。57階から眺めた景色は圧巻である。

建設プロジェクトの総工費が80億シンガポール・ドル（約6400億円）という数字からいかに巨大なプロジェクトであったかが分かる。投資したのは米国ラスベガスに本社を置くカジノリゾート運営会社ラスベガス・サンズであるが、いったいどのようなビジネスプランを描き、投資額の回収を試算したのだろうか。また、東京のお台場に同じようなプロジェクトが成り立つだろうか……。とにかく規模が大き過ぎて想像もできない。

シンガポール共和国

シンガポールは世界屈指のグローバル都市であり、米国のシンクタンクが2017年に発表した総合的な世界都市ランキングにおいて、ロンドン、ニューヨーク、パリに次ぐ世界4位とされている。また、国際競争力が非常に強い国であり、2017年の世界経済フォーラ



マリーナベイ・サンズの57階からの眺め

ムの研究報告書においては、スイス、米国に次ぐ世界3位の国と評価されている。さらに、外国為替市場の取引額では日本を上回り、世界3位に浮上する(2016年)など、世界の金融センターになっている。

人口561万人(2017年)(世界111位)、国土面積719.2km²(東京23区とほぼ同じ)(世界179位)の小さな国がなぜこれほどまで発展したのだろうか？

突如出てきたリー・クアンユーの名前

空港から市内のホテルに向かう途中、タクシーの運転手にシンガポール発展の理由を尋ねてみた。すると運転手から年齢を聞かれ、「ならばリー・クアンユーを知っているだろう」と言われた。最初は何を言いたいのかわからなかったが、これまでシンガポールを発展させたのは建国の父である

リー・クアンユー初代首相の功績によるところが大きいということを伝えなかったようだ。

1965年のマレーシアからの独立以降、天然資源の乏しい小国でありながらも急速な経済発展を遂げ、2007年には1人当たり名目GDPで日本を追い越す豊かな国となったシンガポールだが、その成功のカギの一つは、人材政策にあるといわれる。なお、2017年の1人当たり名目GDP(米ドル)ランキングでは、シンガポールが世界9位、日本は25位になっている。

そして、その人材政策の要は、徹底したエリート主義と高度人材の受け入れにある。エリート主義は、小国であるために効率よく経済発展しなければ国家の存亡にかかわるという厳しい要請と、リー・クアンユーの信条によるところが大きかったようだ。運転手は、強力なリーダーの存在が国を発展させたと言いたかったのだろう。

シンガポールの教育の要

シンガポールにおける学校教育の特徴は、2言語教育とエリート教育で、特に前者が要になっているようだ。

「シンガポールでは初等教育の1年生から授業が英語で行われている。さらにシンガポールは華人系、マレー系、インド系及びその他の複数民族で構成される多民族国家であることから、それぞれの民族の文化的な背景やアイデ

ンティティを尊重するため、英語と同時にそれぞれの母語も学んでいる。この2言語教育は、①国際ビジネス活動においてビジネス共通語である英語の習得が必要であったこと、②国民が社会や家族の調和を重視するアジア的価値観を学び、アジア人としてのアイデンティティを保つために各民族母語の習得が必要であったため、1966年から実施されている」(一財)自治体国際化協会 シンガポール事務所「シンガポールの英語教育について」

日本人にはもっと本格的な英語教育が必要

シンガポールでは、小・中学校での第一言語を英語とした。これは画期的なことではないか。現在の日本では、あくまでも第一言語は日本語。中途半端な語学教育では日本語すらも身に付かなくなると危惧する意見もあるが、シンガポールの成功モデルは十分検討に値するだろう。

日本の場合、生活は豊かになったが、国内のマーケットは飽和状態。企業の海外進出といっても大手企業には人材がいるが、400万社近い中小企業の海外進出はまだまだという状況だろう。社会経済がますますグローバル化してきている今日においては、まず英語教育を本格的なレベルに進化させることが必要かもしれない。シンガポールに学ぶのではないかな。



AWGIPCの会議会場入り口